

バスク民族主義とバスク語

藤田 一成

スペインは「ひとつの祖国に複数の国民が存在する所」といわれる。住民にはスペイン国民という意識は稀薄であり、出身地への帰属意識が圧倒的に強い。それ故に、スペインの歴史は統一性と多様性、即ち国家主権と地方自治をどう調和させるかをめぐる葛藤の歴史であったといつてよく、「国家とは何か」という問いかけへの解答を模索しながら今日に至っている。とりわけバスク地方とカタルーニャの自己主張は他の追随を許さぬ激しさを保持してきたが、その主な拠り所は個有の言語にあった。そのため、中央政府が地域分立主義を弾圧しようとする場合、その鋒先が言語の圧殺に向かうのは当然のことであろう。

事実、フランコ独裁体制をとってみても、その中央集権化政策によって、これらの地域の言語は大きな打撃を受け、民主化後17年を経た今日でもその後遺症に悩まされている。40年にわたるその弾圧は徹底しており、「帝国の言語」であるカステーリャ語（日本でスペイン語と称されている）のみの使用が公私ともに強制された。地名、人名は変えられ、印刷物も厳重な検閲を受け、土地の言葉で書かれた書物は図書、本屋、私宅から没収され、焼き捨てられさえしたのである。

だが、この弾圧はカタルーニャ語よりもバスク語に大きな影響を与えた。筆者はフランコ時代にバスク地方で苦学していたが、バスク語を知らないバスク人の多さに驚かされたものである。彼等の家に行けば、バスク古来の民謡のレコードをかけてその音楽の素晴らしさを熱っぽく語ってくれる。だが本人はメロディーを口ずさむだけで、その歌詞もいえず意味も知らないのだ。彼がバスクの大義を熱弁すればする程、バスク語を知らない心もとなさ、後ろめたさが見え隠れして、痛々し

ささえ感じたものである。これはテロ行為を繰り返す過激な民族運動に対応して一層過酷となった弾圧の結果であったが、またヨーロッパの言語と全く異質な起源不明のバスク語の難解さに辟易して習得意欲をそがれたり、狭い地域にしか通用しないという実利的な面からも敬遠されがちであったことの結果でもある。

19世紀後半に勃興し現代に至る近代的なバスク民族運動は、自らを規定する最大の拠り所をバスク語におき、バスク語を話す住民の多い地域をバスク地方とした。3県より成る現在のバスク自治州もそれ以前にバスク人が民族国家として実効支配をしたことはなく、その領域は極めて人為的に策定されたものなのである。このような言語の重要性にもかかわらず、バスク語の普及率が十分でないという現実にはバスク民族主義にとって由々しい問題であるといわねばならない。バスク語常用者の割合はギプスコア県で45%、ビスカヤ県で15%、アラバ県に至っては10%にも達成せず、バスク自治州の枠外にあるナバラよりも低く、カタルーニャ語を理解できる者が9割をこえるといわれるカタルーニャとは著しい対照を示している。

バスク民族主義は、バスク語をその根幹にすえながら、歴史的に存在する根拠の曖昧なバスク国家の建設を最終的な目的としている。だが、バスク語が住民を結ぶ絆とは必ずしもなりえていないという矛盾した現実を今後どのように克服していくのだろうか。バスク民族運動は、フランコ以来の主役であった武闘派が勢力を失うなかで、重大な岐路に立たされている。

日本英語学会第10回年次大会記

武内 道子

この秋日本英語学会は創設10周年を迎えた。これを記念して11月7日と8日に東京外国語大学にて開かれた年次大会は、盛況にして、特色あるものとなった。ここで、10年というタイムスパンに立って本大会の特色を述べてみたい。

まず、昨年の第9回大会に始まり、今年第2回目のワークショップの報告から始めたい。大会初日の午前中(9:30-12:00)に企画されたこのワークショップは、昨年予想以上の盛況をそのまま受け継いで、6つから7つにプログラムが増え、いづれも活発な討論が行われたということである(七室に発表者は45人を数えた)。私は井谷 玲子氏と共同で応募し、採用され「関連性理論—より説明力のある語用理論を目指して—」というタイトルでワークショップをもった。大阪の四天王寺仏教大学の山崎 英一氏に加わってもらい、慶應大学の西山 佑司氏をコメンテーターに迎えた。80部用意したハンドアウトがすぐなくなってしまった。論文発表者を公募せず、三人だけで関連性理論という一つの有機的理論の目指すものと方法が、全体像としてできるだけ見えるようにと心を砕いて、4月以来準備してきた。

三人の発表論文のタイトル(発表順)は次の通りである。

関連性理論の輪郭：武内 道子

関連性理論の枠組を使って(1)—解釈的用法としての—か：井谷 玲子

関連性理論の枠組を使って(2)—条件文の位置づけ：山崎 英一

5月と9月と10月にまとめ役として(当日は司会を兼ねた)私は、大阪に山崎氏を訪れ、ディスカッションをもった。電話によるやりとりは十数回に及んだであろう。下阪の一回は言語センターから旅費をいただいたことを記して、謝意を表したい。

10周年を記念する事業の一環として、海外から二人の学者を招いて特別ワークショップ(第一日午後)と特別講演(第2日午後)がもたれた。一人は40歳という若さでジュネーブ大学言語学科長をつとめるルイジ・リッツィ氏。統語論、ロマンス語学専攻で、原理とパラメーターによるアプローチの今日の生成現論の基礎を築いた人である。彼の目下の主要な研究テーマの一つである心理動詞(Psych-verb)の分析に関して、4人の発表者と共にワークショップがもたれた。もう一人は、38歳のMIT脳・認知科学科教授スティーヴン・ピンカー氏で、文法獲得理論の第一人者と目される。今回のワークショップでは、項構造の獲得に関して、これまでの言語学・心理学の研究成果を駆使した注目すべき見解を発表した。また特別講演では、リッツィ氏はパラメーターアプローチの比較統語論における有用性を(“Comparative Syntax:A Parametric Approach”)、ピンカー氏は規則・不規則動詞について規則と記憶の相互作用性を(“Rules of Language”)論じた。兩人とも、現在第一線で活躍し、将来的にも大きな影響力が期待される学者で、明快でエネルギッシュな語り口とあわせて、多様な趣味をもつ千人を越す会員を引きつけた。

特別企画に伴って、本大会の研究発表は二日目の午前中のみになり、発表数をかなり制限することになった。しかし、ワークショップの45名を含めて、本大会の発表者総数は97名の多きに達し、その6割余が女性であったことは、特筆すべきであろう。東武パンケットホールでの会員懇親会もとりわけ華やかであった。二人の海外研究者、来年度からの新会長、副会長をはじめ、初代会長の安井 稔氏、唯一の女性会長の井上 和子氏が話をされた。

83年に上智大学で産声をあげた日本英語学会の10年は、そのまま日本の英語学研究の変遷と重なる。英語学会が年々質的にも量的にも充実してき

たということは、日本の英語学研究の隆盛そのものとみなしてよいだろう。隆盛のひとつに、会員の海外での活躍ということがある。海外の学会は単に参加することから、研究発表、講演がポピュラーになってきたし、海外での出版も活発である。この傾向は英語学会創設と時を同じくして始まったと思う。

二つ目にいえることは、興味の対照が多岐に亘ってきたことであろう。この学会は始めから、英語をはじめとする個別言語の実証的研究と、一般理論的研究の間にフィードバックが働いていたと思うが、どうしても統語分析中心、しかもGB理論

が巾をきかせてきたという感は否めなかった。今大会では、発表がGB理論の枠組一辺倒でなく、新しい視点に立ったものが、目立った（私たちのワークショップもそのひとつ）。理論内の異端に対する、また隣接諸分野に対する寛容さを見たように思った。

実証と理論がダイナミックにかかわりあい、相互触発的ないき方が研究の原動力であるが、既成の枠組にとらわれない自由で批判的な目と、寛容の精神が加われば、次の10年もさらに大きく発展するであろうことは間違いない。そう確信して会場をあとにした。

[研究調査報告] 作詩法とインスピレーション

—— シャルル・ペギーとフランシス・ジャム ——

倉田 清

近代を代表する詩人シャルル・ペギー（1873－1914）とフランシス・ジャム（1868－1938）の作詩の条件について南山大学で研究調査を行なった。

ペギーの場合、ダンテが〈inventer〉（考案する）のに対して、〈découvrir〉（発見する）のだと主張している。ここに独特な創作態度を伺うことができるが、inventerは“工夫する”、“創意をこらす”、“想像力を藉りてする”という意味であり、「企図をもって働く」ことである。これに対してdécouvrirとは“物の覆いを取る”、“発見する”、“存在する可視的、不可視的なものを見出す”という意味であり、「直観をもって働く」ことである。そして、ペギーは「恩寵の指示に従って」(selon les indications de la grâce)、自己の深い泉から湧き出すものを発見しながら、ある時期には、毎日、午前中50行、時には、100行の詩句を創っている。「発見するためには、偶然ではなく、不定の漠然としたもののうちではなく、中心的な点に対する絶え間ない照合を行ないながら、すべてのものが湧き出る深い泉を自己のうちに持たなければならない」と、彼は言っ

ている。そして、このようなペギーの創造の精神的条件は、二十世紀を代表するもう一人の大詩人ポール・クロードル（1868－1955）の大洋の絶え間なく打ち寄せる波浪として表現される詩句がまさに示すと同じように、ペギーの言う内的湧出の絶え間ない緊張と明晰な思考の力によって秩序づけられる。

ところで、単純で清楚な詩句で“自然”と“恩寵”を和解させたジャムは、自然の描写にせよ、感情の開陳にせよ、内的なものが少しずつ昇ってゆく時、そこに働くのは聖なる“震え” (frisson) であると言う。詩人は、一瞬一瞬にこの震え、いわば、神の震え (tremblement)、天使の翼の起こす風というようなものを内的に直観するのだと述べている。これが詩人の内奥に働くインスピレーションである。(Le Poète et L'Inspiration, p.42) このジャムの説は1922年のものである。

これに対して、ペギーは、すでに1910年、“書く震え” (tremblement d'écrire) について述べている (Victor-Marie, comte Hugo, p.695)。ジャムよりも12年先んじている。哲学者アンリ・

ベルクソンは、この震えについて、「意識はどの瞬間の中にも何十億かの振動を含んでいる」と言っているが、芸術家の創造的意識こそ、詩的インスピレーションであろう。インスピレーションによって思考された思想、構想を与えられた芸術作品、着想あるいは夢想された詩は、言葉や彫刻や絵画という物質上にそれぞれの独特な論理に従って創造されるということが出来るのではあるまいか。生命論による直観と論理との関係が考えられる。

ジャムは、自由詩から伝統的な韻律法の真髄に近づいてゆくが、定型詩の古典的なリズムに戻って厳正な格調で、誰にでも判る易しい言葉で、人間の寂しさを、苦しみを、そして、喜びを詠う。彼は対連と四句連の形式をとる。二行づつ相伴って沈黙から湧き出る調べは、それが通り過ぎた後心の中に長い余韻を残して、ふたたび静寂に帰る。われわれは、詩節の一つ一つに超自然の流れが通っているのを強く感じる事が出来る。

一方、ベギーは、さまざまな感情や思考を示す

ために、内的振動のメッセージを書き写す状態を〈C'est dicté.〉（口述されたものを書き取る）と言い、「作家（詩人）は、言葉の絶えざる流出の中に生きており、いくつもの世界が一瞬ごとに作家（詩人）の筆先を通過させられる。波浪の打ち寄せる大洋はその尖端の厚みと幅しか一度に通ることができない」と述べている。例えば、彼の1万5千行の及ぶ一大叙情詩『エヴァ』（Eve, 1913）は、宇宙と歴史と人間の条件についての冥想詩であるが、この大作は、全体にわたって一つの区切りも章もなく、「厳しい制御から瀑布となって落下する詩句の絶えざる奔出であって、すべては噴出であり、秩序である」と詩人自身が言っているように、常に新しく、自発的な噴出の観念を示すものであろう。

ベギーとジャムにおける内的震えとしてのインスピレーションは、すべての芸術家の創造的意識の根源に実存するものであろう。

（1992年7月、10月南山大学図書館にて）

「回顧と展望」

伊藤 克敏

「歳月人を待たず」という諺があるが、犬飼前所長からバトンを受取ってから早や6年の歳月が流れてしまった。

限られたスペースではあるが、過去6年を振り返り、今後への抱負の一端を述べ度い。初年度の1987年には、11月25日に「本学における語学教育のあり方」と題したシンポジウムが開かれ、一般外国語、一般英語教育、各学部の代表が出席し、各々の立場より提案がなされた。主なものを紹介しておくとして、①少人数クラス（20～25名）の確立、②授業内容の見直し、③第二外国語の見直し（必修化も含め）、④外国語を母語とする教員の採用、⑤入学ガイダンスで第二外国語の履修を強く勧める、⑥非常勤講師の給与体系の見直し、等である。こういった提案、要望は、余り実現していないように思われ、今後更なる努力の積み重ねが望まれる。

同じ此の年度より、所員の意思疎通を計るために「ニューズレター」が発行されるようになった。

エッセイ、語学教育、研究に関する提案、問題提起、学会動向等を中心に、所員間のコミュニケーションが計られることを願っている。

1988年度には20号館（語学演習棟）が完成し、3階に「外国語研究センター」が移転して新しいLLも設置され、新しい出発となった。神奈川大学創立60周年記念号から『言語研究』と名称を改めた。本研究紀要第11号の「異文化理解とコミュニケーション」、第12号の「言語論的転回の意味するもの」といった講演要旨、更に、掲載論文からも察せられるように、言語学プロパーに限らず、関連諸科学的な色彩が濃くなりつつあることは、現代言語論の特色でもあり、また、語学教育の巾を広げるためにも意義深いものであると思われる。

こういった動向を受け、1988～9年頃から従来の狭義的な語学教育中心から「ことばと人間」の問題を広く関連語科学から研究し、「人間教育としての言語教育」への発展を志向し、1990年度より「言語研究センター」(Institute for Language Studies)と名称を改めた。共同研究班を結成し、研究発表も不定期に行っていたのであるが、今のところ軌道に乗っているとは言い難く、どのように活性化するかが今後の課題の一つである。唯、機器備品を購入し、研究体制に入っている班もある。

1990年度より、活躍中の学者を外国から招聘し、昼間、主として学生を対象に二回の講演、夕方は学内外の専門家を対象に二回、連続講演会を開催している。現在まで、米国、カナダ、中国、英国等から学者を招き、第二言語習得論、社会言語学、意味論、心理言語学、日本語学等、巾広い分野にわたって、最近の研究動向に関する情報を得る機会が与えられ、内外に好評を博している。

主として神奈川県中学、高校英語研究会の先生方からの要望で、中、高、大の英語教育の問題を共に考える場が欲しいということで、1990年度より「英語教育研究大会」を秋に開催している。県下中、高で英語教育に携わっている卒業生も含め、

熱心な英語教師が一堂に会し、内外の講師共々、英語教育の今日的課題を取上げ、講演、ワークショップ等で研究協議するプログラムで、すでに三回行って来ている。適切なテーマの設定、参加者の問題意識の吸上げ、取上げ方等、今後現場の声も聞きながら、よりよい大会にするためにきめ細かな検討を重ねる必要がある。

1990年度から始まった三つ目の新しい企画は、一般市民へのサービス並び生涯教育の一環としての「語学教養講座」である。2月末から3月初旬にかけての10日間で、1990年度は英語、西語、中国語の三カ国語で、1991年度はそれに仏語、独語、ロシア語、朝鮮語の四カ国語を加えた七カ国語で開催した。1992年度には更にイタリア語も加えて八カ国語の講座を提供することになっている。この講座も、期間が短か過ぎてまとまったことができない等、企画の全体的な見直しの必要が指摘されている。

運営委員や所員の皆さんの御協力により、ささやかな改革を行って来たのであるが、すでに述べたように、今後更に充実発展させるべき点も多く、新所長山口健治教授に大いに期待したい。最後に、御尽力を賜った多くの方々に深甚の謝意を表し度い。

★新着案内★

一視聴覚資料一

録音資料

ГОРИЗОНТ

РУССКИЙ ЯЗЫК・

ПРАКТИЧЕСКИЙ КУРС

英語水平考試

鴛鴦楼

現代中国語基礎

Direkt auf Europa auf Deutsch

音声学

今日英語

日本の今を世界へ

Russian Intonation

Voices of History

Anthology of XIX Century

American Poets

Longston Hughes reads

and talks about his poems

The Poems of Richard Wilbur

Ralph Waldo Emerson poems

and essays

Treasury of Henry Wadsworth

Longfellow

The Poems of JAMES Dickey

Roetry of Edna St.vincent

Millay

Vachel Lindsay Poetry

Wynken, Blynken and Nod and

Other Poems

Childe Rowland and other

British Fairy Tales

the poetry and voice of Muriel Rukeyser

The Adventures of Huckleberry Finn

初歩のスペイン語

スペイン語実力問題集

日本人とアメリカ人の表現構造

スペイン語の入門

起きてから寝るまで表現550

海外旅行編

Bing Bang Boom!

英会話 POWERアップ 30分

マザーグースとあそぼう No.3

シュルブルの雨傘

ラ・ブーム

ジャパントイズ社説集

1990年上半年, 下半年

映像資料	TRADITIO:An Introduction to	COMPARATIVE DES LANGUES
愛の記録	the Latin Language and...	INDO-EUROPENNES
招待	VOICES OF THE WINDS:NATIVE	SEMILOGIE LITTERAIRE ESSAIS
アウシュビッツの女囚	AMERICAN LEGENDS	SUR LA SCENE TEXTUELLE
日本ーその姿と心ー	A Refeience Guide for English	LA REUNION DES LANGUES, OU
NHK中国語入門	Studies	L'ART DE LES APPRENDRE
フランスTVマガジン	The Collected Works of Edward	TOUTES
モスクワニュースビデオ版	Sapir, VII	岩波情報科学辞典
イギリス詩の600年 11~13	LINGUISTIQUE HISTORIQUE ET	Macintosh Music
音声学	LINGUISTIQUE GENERALE,TOME II	マッキントッシュ音楽操縦法入門
ビデオ音声学	文法と意味の間	中国音韻論集 頼惟勤著作集 I
悲しみよこんにちわ	日本語学の新展開	中国古典論集 〃 II
八千里路雲和月	ことばの饗宴ーうたげ	BROCK HAUS ENZYKLOPÄDIE 12
SGAV 方式日本語初級こんにちは	INSTRUCTED SECOND LANGUAGE	〃 13
English Language Video Test	ACQUISITION	平成2年版 全国大学職員録
地下水道	COMMUNICATION STRATEGIES	国立大学編
灰とダイヤモンド	中国大百科全书 世界地理	平成2年版 全国大学職員録
バサジェルカ	中国大百科全书 外国歴史 I	私立大学編
尼僧ヨアンナ	〃 〃 II	Français médiéval
さすらいの青春	中国大百科全书 建筑・园林・城市	Langue, discours, société
悪魔の陽の下に	规划	PETITE GRAMMAIRE DE L'ANCIEN
クレヴの奥方	Linguistic Ambiguity in Natu-	FRANÇAIS
ジャンヌ・ダルク裁判	ral Language	MANUEL PRATIQUE D'ANCIEN
大理石の男	A HANDBOOK FOR WRITING	FRANÇAIS
ケネディ	RESEARCH PAPERS	Syntaxe du français
Charlottés Web	ドイツ政治経済法制辞典	INTRODUCTION A L'ANCIEN
Scènes de la vie bretonne	統計用語辞典	FRANÇAIS
Molière:L'oeil en coulisses	Second Language Classrooms	Fiches de philologie française
Orphée	International Encyclopedia of	Brève histoire de la linguistique
L'Amour à la Française I,II	Communications Vol.1	SYNTAXE DU FRANÇAIS CONTEM-
Face to Face	〃 2	PORAIN Les pronoms
Signs of the Times	〃 3	SYNTAXE DU FRANÇAIS CONTEM-
日本の今を世界へ	〃 4	PORAIN Les Propositions
The World Says "Welcome"	ENCYCLOPEDIA OF LITERATURE	subordonnées
	AND CRITICISM	SYNTAXE DU FRANÇAIS CONTEM-
	PRINCIPLES OF LANGUAGE	PORAIN L'Infinitif
	TESTING	
Горное Дело: Терминоло-	哲学大辞典	
гический словарь	TRAITÉ DE GRAMMAIRE	
A Dictionary for Believers and	COMPARÉE DES LANGUES	
Nonbelievers	CLASSIQUES	
Annotated Bibliography of	INTRODUCTION A L'ÉTUDE	
Southern American English		

一図 書一